

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月18日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04369

研究課題名(和文)大学生の「グローバルな能力」獲得と活用の過程 - 4タイプの国際経験による比較研究

研究課題名(英文) Process of Acquisition and Utilization of University Student's "Global Ability" -Comparative Study by 4 types of International Experience-

研究代表者

岡村 郁子 (OKAMURA, IKUKO)

首都大学東京・国際センター・教授

研究者番号：20532154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：国際経験をもつ大学生の「グローバルな能力」の獲得と活用の過程について、大学短期留学型(交換留学生) 家族駐在型(帰国生) 中学・高校単身留学型 インターナショナルスクール在籍型」の4タイプに分けて対象者にインタビューを行い、比較検討した。大学短期留学経験者は、適応力・順応力、コミュニケーション能力、異文化への理解力などの能力を身につける反面、自信喪失や日本社会への違和感などの語りも見られた。留学経験者・帰国生のほぼ全員が海外につながるキャリア形成を目指していたが、帰国生では「帰国生」というポジショナリティから自分の能力を捉え、それをキャリアに活用しようと考えている点が特徴といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、さまざまな海外経験を通じて、語学力のほか広い視野やコミュニケーション能力などの「グローバルな能力」を身につけた若者が着実に育ち、海外につながるキャリアを目指していることが明らかになった。他方、日本の大学教育や就活・日本企業の在り方に疑問を持つようになる者もみられ、今後はグローバルなキャリアを志向し、日本を離れて就職する者が増える可能性も示唆された。日本の国際競争力を高めるためには、まず日本企業がグローバル人材の受け皿としての機能を十分に果たすことが重要である。海外の価値観に触れて「脱・日本の感覚」を唱える若者が、グローバルに活躍するための国内の土壌を整えることが喫緊の課題である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to show the process of acquisition and utilization of "global ability" of university students, in the comparison by 4 types of international experience; Short-term study abroad students Family-based type (returnee students) Students who had study abroad during High/Junior high school days International school. Those who had studied for short-term as the exchange students have acquired abilities such as Adaptability, Stress tolerance, Communication skills, and an ability to understand different cultures. On the other hand, such as loss of self-confidence and discomfort to Japanese society were also observed. Almost all of the study abroad students and returnees were aiming to create a career leading to overseas, but in the narrative of returnees there is a point that they intend to capture their abilities from the "positionality of "Returnees" and use them in their careers.

研究分野：異文化間教育、日本語教育

キーワード：グローバル人材育成 留学のインパクト 留学とキャリア形成 グローバルな能力 帰国生の特性 留学の効果測定

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の急速な進展に伴い、「グローバル人材育成」は国家の急務として位置づけられている。とりわけ大学在学中の海外留学は大いに推奨されるところとなり、2009年「グローバル30」、2011年「大学の世界展開力強化事業」、2012年「グローバル人材育成推進事業」と、文部科学省による高等教育の国際教育推進事業が強力に進められてきた。このような状況に鑑み、留学を終えた大学生がどのような「グローバルな能力」を獲得しているのか、現状に即して検証することは重要な課題である。一方で、大学進学以前に国際経験をもつ若者も「グローバル人材」としてのポテンシャルを有している。とくに家族の駐在に伴い海外生活を送った経験を持つ、いわゆる「帰国生」については、「豊かな海外経験を持つ、わが国と海外とのネットワーク強化に貢献する貴重な人材」(経済団体連合会,2000)と評価され、「グローバル人材」としての社会的期待が高まっている。

2. 研究の目的

本研究は、国際経験の時期や形態、留学の動機の異なる大学生へのインタビュー調査により、かれらの「グローバルな能力」の獲得と活用の過程を明らかにすることを目指した。その際、国際経験をもつ大学生を、「大学短期留学型(交換留学生)」「家族駐在型(帰国生)」「中学・高校単身留学型」「インターナショナルスクール在籍型」の4類型に分け、それぞれの国際経験により、獲得する「グローバルな能力」に差異があるかに着目して比較検討を行った。

研究課題は以下のとおりである。

(1) 対象者がどのような異文化に接し、その国際経験を通じてどのような「グローバルな能力」を獲得するのか

(2) グローバルな能力の獲得に関連する背景要因はどのようなものか

(3) かれらが獲得した能力がかれらのキャリアに与えるインパクトはどのようなものか。

なお、当初は上記の4タイプについて検討する予定であったが、インターナショナルスクール出身で日本の大学に在籍する調査対象者の確保が困難であったため、結果として以下に示す4タイプ(大学短期留学型を「留学必須型」と「一般的な交換留学」の2種に類型化)の比較研究となった。

3. 研究の方法

(1) 調査方法

2015~16年にかけて、東京都内および地方都市の国・公・私立大学に在籍する大学生49名を対象に、インタビュー調査ならびに補助的な質問紙調査を実施した。分析にあたっては、対象者を留学時期および留学の動機により以下の4つに分類し、属性による差異に着目した。留学期間はいずれも一年間程度である。

大学短期留学型(12名):一般的な「交換留学生」として、海外留学をした者。

大学留学必須型(14名):大学卒業のための必須単位として海外留学が必要な者。

高校単身留学型(23名):高校在学中に海外留学をし、現在大学に在籍している者。

帰国生(16名):5年以上家族と一緒に海外に滞在し、高校段階以上で帰国した者。

(2) 分析方法

調査協力者1人あたり1時間程度の半構造化インタビュー実施し、データは文字化した後、質的分析支援ソフトNVivo11 Proを用いてコーディングを行った。主なインタビュー項目は以下のとおりである。

属性および環境要因:性別、年齢、滞在国、滞在年数、帰国時年齢等の属性、大学での専攻、家庭の教育戦略、在外時と帰国後の学校環境、等。

内容:大学受験と大学生活、留学の動機、留学先決定の経緯、国際経験を通して獲得したグローバルな能力、アイデンティティ、在外時と帰国後の学校生活、将来のキャリア展望、「グローバル人材」の定義、「グローバルな生き方」の定義、等。

4. 研究成果

(1) 国際経験により得られた「グローバルな能力」とは

留学経験者のもつ「グローバルな能力」としての言及には【語学力】【自分を発信する力】【積極性・行動力】【適応力・順応力】【異文化への寛容と理解】【日本人としてのプライド】【忍耐力】などが挙げられた。このような力を獲得するに至った経験について留学時期による差異をみると、高校からの留学経験者の方が、ホームステイ先のホストファミリーとの関係やボランティア経験など現地の家族やコミュニティに密着した経験、学校での友人作りに関する言及が多く、彼らは帰国後も現地との深いかわりを持ち、ボランティア活動を続けていた。

一方、大学からの留学経験者では、【ハイレベルな授業についていく苦労】や、【将来のキャリア】への言及が多くみられた。さらに海外留学が卒業条件として必須となっている大学生では、大学入学以前から留学への高い熱意や目的意識を持っていたものが多く、留学までの準備学習に積極的に取り組んでいたこと、現地での授業への参加などに関する詳細な言及が多くみられた。

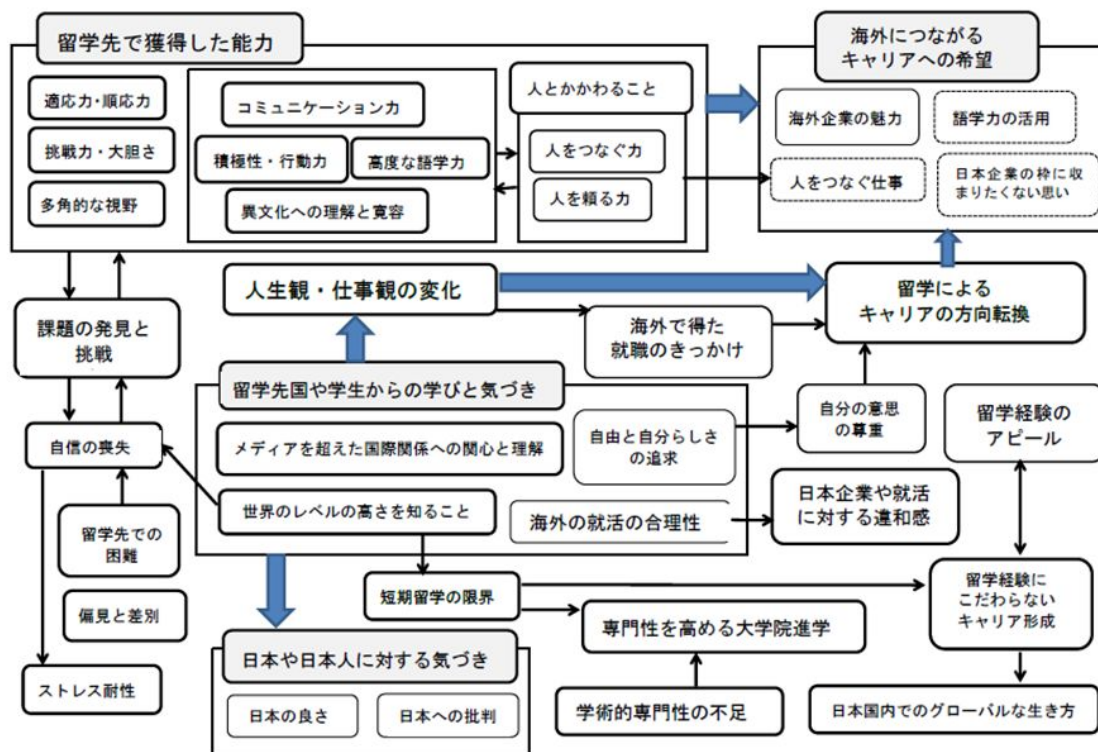
高校からの留学経験者が地域コミュニティとより深いかわりを持つという結果は、高校生段階では学校の指導方針が徹底しており、ボランティアへの参加や携帯電話使用の禁止などの

条件を忠実に守って生活したことや、ホームルームに所属することでクラスでの友人関係がより緊密であったことによると考えられるだろう。大学からの留学では留学経験をどう将来のキャリアに活かすかが大きな関心となり、授業にも明確な目的意識をもって取り組んでいることが窺われた。

一方、帰国生においても、留学経験者と同様【高度な語学力】【積極性・行動力】【コミュニケーション力】【異文化への理解と寛容】【適応力・順応力】【多角的な視野】に関する自己の能力を多く語った。その際に強調されるのは、日本で生まれ育った人々、特に同世代の日本人と自分との間に見出される意識や能力の差異であった。

(2)「グローバルな能力」がキャリアにもたらすインパクト

本調査の対象者のうち、の留学経験者のインタビューから抽出した概念をカテゴリー化し、それらの関係性を整理することにより、留学経験による気づきや学び、獲得した能力が、キャリアにインパクトをもたらすプロセスを検討した。結果を以下の図に示す。



「留学先で獲得した能力」としてもっとも多く語られたのが【人とかわること】である。「もともと自分からは話しかけない」タイプだった学生も、留学先では「仲間を作る」ために人に話しかけ、「居場所の確保」のため「サークル活動」や「パーティ等のイベント」等に参加し、【積極性・行動力】や【コミュニケーション力】を身につけて人とかわってきた。同時に「英語以外の言語」・「ネイティブでないアクセントのある英語」など【高度な語学力】も獲得する。また、【偏見と差別】、「ホームステイ先」や「事務手続き」等におけるトラブル、「閉鎖的な留学先での友人関係」等の【留学先での困難】を乗り越える中で、困った時に「人を頼る力」、「ピンチの時に粘り強い」【ストレス耐性】が強化された。

「留学先国や学生からの学びと気づき」では、まず友人の「勉強量の多さ」に驚き、【世界のレベルの高さ】を目の当たりにする中で、自ら「一回は発言する」ノルマを課したり、「プロジェクトワークへ参加」したりするなどして「専門分野での新しい学び」を得てきた。さらにアジアへの留学では「領土問題についての議論」などを通し、「メディアを超えた国際関係への関心と理解」を深め、【多角的な視野】を得たことも語られた。海外の学生たちの「政治への関心の高さ」に触れ、国内のこともよく知ろうとしない「日本人への批判」や「日本の感覚から抜け出すことの必要性」などの「日本や日本人に対する気づき」も得ている。「自分のできなさ」から【自信喪失】し、「何もかもうまくいかず」「逃げの姿勢」に入ることもあるが、そこから新しい【課題の発見と挑戦】を重ねてきた。学校外での経験としては、「土地の人たちとの触れ合い」における楽しさや発見があり、「宗教心」や「礼拝等の習慣」に触れた驚きも語られた。このような経験を通してさまざまな能力を身につけたと認識する者もいる一方で、「一年だけでは経験不足」であり、「世界展開を見渡すような視野は得られない」という【短期(交換)留学の限界】への指摘や、「先進国はどこも同じ」と感じたり、「たかだか一年の留学で自分の内面が劇的に変わることはない」とする者もいた。さらに、「国際展開力の高い」アジアの留学先における「国の威信をかけて留学生を受け入れる」ための「留学生受け入れ制度の充実」を実感し、日本の受け入れ体制との違いに触れるなど、日本のグローバル人材育成施策に対する示

峻につながる言説もみられた。

さらに、留学経験によるキャリア形成へのインパクトとしてもっとも顕著であったのは、[多国籍企業]や[海外展開のある日本企業への就職]という「海外につながるキャリアへの希望」である。ここには『オープンで透明な』[海外企業の魅力]と同時に[日本企業の枠に収まりたくない気持ち]『日本企業は英語ができるだけではだめ』という日本企業への就職への抵抗感も関連している。また、留学先で得た能力を活かして、世界で[人をつなぐ仕事]をしたいという言説も多くみられた。

一方、帰国生の間にも、留学経験者にみられた【海外につながるキャリアへの希望】が顕著に現れた。また、海外経験を通じて培った能力を職業で積極的に活かしたいと考えている点も留学経験者と同じであるが、帰国生の場合、企業側も「帰国生」としての能力発揮を期待した採用をしていることがうかがえる。帰国生の語りとして顕著に浮かび上がるのは、かれらが「帰国生」というポジションナリティから自分の能力を捉え、それをキャリアに活用しようと考えている点である。そして語学力や行動力に限定される傾向があるものの、企業側にも帰国生の能力を積極的に活用しようという姿勢がうかがえる。この相互作用の中で、帰国生の場合は長期にわたって海外滞在経験がキャリアに影響を与えることが予想される。

本調査で明らかになったように、海外経験を通じてグローバルな能力を身につけた若者が着実に育ち、海外につながるキャリアを目指していることは朗報であろう。他方、海外企業への就職者が増え、「国内外問わず」にグローバルなキャリアを目指す者が日本を離れて就職することになれば、経団連(2011)が想定する「日本企業の事業活動のグローバル化を担う」という、グローバル人材の定義を問い直すことも必要になるかもしれない。日本の国際競争力を高めるためのグローバル人材育成であれば、日本企業がその受け皿としての機能を果たさなければ本末転倒である。海外の価値観に触れて『脱・日本の感覚』を唱える若者にとって魅力ある日本企業へと変わることも、喫緊の課題となるだろう。今後はこのような経験を持って就職した人たちが、特に日本企業においてどのようなキャリアを築き、どのように評価されているのかの検証も必要であろう。海外経験の真価は社会的文脈においてこそ問われるべきであり、その研究は今後の課題である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

「海外経験がキャリア形成にもたらすインパクト 大学短期留学経験者と帰国生の語りから」岡村 郁子・額賀 美紗子、『異文化間教育』第48号, pp.35-52, 査読あり, 2018年

「帰国生の日本再適応過程における「グローバル型能力」の変容 - 国内安住志向と国際移動志向への分岐」額賀 美紗子、『国際教育評論』(13), pp. 1-17, 査読あり, 2016年

[学会発表](計9件)

「グローバル時代の能力観と能力形成 - 海外帰国子女教育の視点から」額賀 美紗子, 海外子女教育振興財団学校会員連絡協議会, 招待講演, 2018年11月

「高校からの留学経験が進路およびキャリアに及ぼす影響」岡村 郁子, 第17回多文化関係学会(於椋山学園大学), 口頭発表, 2018年9月22日

“How does the “global competency” impact the future carrier of the university students? The impact of “global competency” for the future carrier of the university students” Ikuko Okamura, APAIE(Asia Pacific Association for International Education)@ Singapore, ポスター発表, 審査あり, 2018年3月27日

「帰国生のグローバルな能力とは」岡村 郁子, 海外子女教育振興財団学校会員連絡協議会『今後の帰国生受け入れについて 帰国生の特性と受入校の役割を考える』招待講演(於金沢工業大学虎ノ門キャンパス), 2017年11月20日

「大学生の「グローバルな能力」獲得について - 3タイプの国際経験による比較 - 」岡村 郁子・額賀 美紗子, 第38回異文化間教育学会(於東北大学)共同口頭発表, 2017年6月17日

「学校は文化的多様性と民主主義をどのように教えているか - 日米比較の視点から - 」額賀 美紗子, 子ども社会学会大会, 2017年3月

“Global Competency of Japanese University Students” Ikuko Okamura, APAIE(Asia Pacific Association for International Education)@ Kaohsiung, TAIWAN, ポスター発表, 審査あり, 2017年3月20日

「大学生が獲得したグローバルな能力とは 留学時期と動機による比較」岡村 郁子，
第15回多文化関係学会（於佐賀大学）口頭発表，2016年9月30日

「大学生が考える「グローバルな能力」とは インタビューおよび質問紙調査の結果による一考察」岡村 郁子，第2回混合研究法学会（国際混合研究法学会アジア地域会議、於東邦大学）口頭発表，2016年8月28日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<https://www.tmu.ac.jp/stafflist/data/a/7550.html>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：額賀美紗子

ローマ字氏名：NUKAGA, Misako

所属研究機関名：東京大学（2016年度まで和光大学）

部局名：大学院教育学研究科(教育学部)

職名：准教授

研究者番号(8桁)：60586361

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：井田頼子

ローマ字氏名：IDA, Yoriko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。